

「暴力と形而上学」における他者と言語の問題

— 教育哲学における「他者論」についての予備考察 —

朱 燦

0. はじめに

近年教育哲学の文脈では異質性や理解不可能性という意味において、「他者」(l'autre)というテーマがしばしば取り上げられ、その理論的な根拠を現代フランス哲学の巨頭の一人であるレヴィナスに見出している。そうした受容の仕方に対して、これまでは受容の仕方についての検討や(小野、2002)、脱個体化を引き起こす苦しみに重心をおいた検討を行われたりはしたものの(平石、2010)、「他者」を他の人間と同一視し、その倫理性に重点が置かれていることに変わりはない¹。しかし、「他者」という概念の射程は、本来他の人間という意味に留まるべきものではなく、古くはギリシャ哲学、例えばレヴィナスが認めたようにプラトンの哲学にも、「同」と「他」の問題がすでに出現している。そこで本論は、レヴィナスの初期の思想に対して批判的な検討を加えたデリダの論考「暴力と形而上学」(1967)を他者の問題を中心に辿りつつ、この問題について検討を加えてみたい。

この検討は以下のように構成される。まず、レヴィナスの初期の代表作である『全体性と無限』における他者と他人の区別について整理をする²。次に、他人に与えられた特権性を、レヴィナスが批判したフッサールの現象学やハイデガーの存在論に即して批判し、他者一般の可能性のほうから他人を思考するデリダの思考様式を見る。最後に他者一般の可能性を思考することと言語の不可避性の問題を結びつけて、他者の問題を言語の問題として考える上で、そこから教育哲学における展望について述べる。

1. 他者 l'autre と他人 l'autrui について

『全体性と無限』の序文において、レヴィナスはその著作において志向しているものが「全

¹ 『教育哲学研究』のなかから、レヴィナスに関連する先行研究について以下を参照した。
2002年、第85号、小野文生「教育哲学における他者解釈の技法の機制について—レヴィナスとブーバーの比較を通して—」
2010年、第101号、平石晃樹「レヴィナスにおける苦しみをめぐる思考と人間形成への問い—『無益な痛み』を中心に—」
2011年、第104号、平石晃樹「自律と他律—レヴィナスにおける〈教え〉の概念をめぐって—」
2015年、第111号、山口美和「エマニュエル・レヴィナスの思想における『近さ』の意味」

² l'autre の訳語について思想家や用いられるそれぞれの文脈に従って、また訳者によって、「他」、「他者」、「他なるもの」等々といった訳語の差異がしばしば見られるが、本論は、便宜上「暴力と形而上学」(所収『エクリチュールと差異』合田正人、谷口博史訳、法政大学出版局、2013年)の用語法を採用し、l'autre を「他者」、l'autrui を「他人」と原則的に採用する。

体性との断絶」としての超越、無限であることが繰り返し主張している(Levinas, 1971, 13-34)。その背景には、西洋哲学が全体性の概念、言い換えれば、「同」(Même)の原理に支配されているというレヴィナスの哲学史観がある。「同」の原理に決して支配されることのない「他」(Autre)への関心はこのような文脈のなかで提起されている。むろん、「同」と「他」の二元論を作り上げ、それを統合ないし図式化して、結局は同に戻ってしまうような愚をレヴィナスは犯さない。レヴィナスはあらゆる同化の動きを慎重に封じつつ、同と他の間にある無限な隔たりを繰り返し強調する。

しかし、単に同による回収、還元を拒否するだけでは、無限な他者を否定性によって同に結びつけてしまう。つまり、この場合「他」は「同」でないという形で規定され、「同」によって規定されることで「同」の地平に収まってしまう。そうでなく、「同」と徹底的に絶縁した「他」について、レヴィナスは『全体性と無限』の第1部第2節「全体性との絶縁」を述べたすぐ後に第3節「超越は否定的なものではない」で論じている(Levinas, 1971, 56-58)。

不完全なものを否定するだけでは、形而上学的な他性の概念にとって十分ではない。完全性はまさしく、概念的に把握されたものを踏み越え、概念をあふれだして、隔たりを出し示すからである。完全性を可能にする理念化は極限への移行である。ことばを換えれば一個の超越であり、他なるもの、絶対的に他なるものへの移行である。(Levinas, 1971, 58)

レヴィナスにとって、超越とは絶対的な他者への移行であり、この「絶対的に他なるもの」は概念的な把握を超えたものである。この超越の目標として定められた「絶対的に他なるもの」は単なる抽象概念や明証を超えて、具体性が与えられている。

「絶対的に他なるもの」に具体性を与えるために、他人(l'autrui)という用語が登場するのは、上記の箇所より少し前の第二節においてである。「絶対的に<他なるもの>(Autre)とは<他人>(Autrui)である」(文中フランス語は筆者が補ったもの)(ibid., 52, 一部改訳)。この「他人」という用語は「異邦人」という意味が与えられた後に、対面関係が強調される。

全体性をかたちづくることのない諸項の関係が存在することの一般的なエコノミーにおいて生起しうるのは、したがって、〈私〉から<他>に向かう関係、対面の関係、深度において隔たりをえがくような関係としてだけである(強調は筆者による)。(ibid., 53)

全体性にならないような他者との関係を、対面の関係としてだけ考えていることが明白にあらわれている。全体性にならないためには、二つのことが条件としてほめかされている。一つは自他がそれぞれ項を形成していることであり、もう一つは二つの項の間に隔たりが破壊されないということである。

一つ目の条件が破壊されることの例は、「時間と他者」(1948)において、自己と死との関係に見られる。他者として「死」は「私」のものにはなりえないが、その到来によって「主観性そのものが打ち砕」かれることになる(Levinas, 1948, 68)。これに対して「他人」との超越的な関係において自我が保存されるとされる(ibid., 70-71)。二つ目の条件が破壊される例としては、「全

体性と無限」の第2部において自我(moi)が生起する過程を記述する際に、「糧」との関係において見られる。レヴィナスによれば、「糧」との関係は表象的でも道具的でもなく、「享受」とよばれる「～によって生きる」という関係である。その享受という関係の本質は、「糧をとることで新たな氣力をうること」であり、「他なるものを<同>へと変容すること」である(Levinas, 1971, p. 212)。一つ目と同様に、他人との関係はこのような変容は許容されない³。

つまり、レヴィナスは他者を論じる上で「他人」にある特権性を与えている。その特権性とは、観念的な把握可能性を超えているので、決して同に回収されることがないにもかかわらず、現れることが可能であるということにある。このことをレヴィナスは「顔」という用語で記述している。

私のうちにある<他者>(l'Autre)の観念を踏み越えて<他者>(l'Autre)が現前する様式は、じっさい顔と呼ばれている。(ibid., 80, 文中の原語は筆者が補ったもの)

観念による回収、還元を逃れさりつつも、「私」への現前の通路が確保されているものとして「他人」との対面的な関係が描かれている。そのような現前は概念による現前とは別に、概念を「あふれだし」、「それ自体として」「自らを表出する」仕方で「啓示」される(ibid.)。つまり対面的な関係において、「他者」はいかなる媒介を経ることなく、直接的に現前するのである。

しかし、レヴィナスによれば、この直接的な現前は十全なものではない。

<他人>(Autrui)はその表出にあつて、思考が<他人>(Autrui)から奪い取ってきた観念を一瞬一瞬あふれ出してゆく。そのように<他人>に近づくことは、したがって、《私》の容量を超えて<他人>を受け入れることである。(ibid., 強調は原文のまま、一部改訳)

「他者」のそれ自体としての表出は「私」や観念との関係においてしか定義することができない。「他者」の表出に与えられた「教え」という一見すると肯定的に見える記述も結局は同じように規定されている——「教え」は「私が抱え持っている以上のものを私にもたらす」(ibid.)。こうした記述は「他人」の把握不可能性を指摘するものに留まっており、「他人」の現前としての顔について述定が回避されている。この種の回避に、「他人」の現前におけるある種の否定性を読み込むことを可能であると思われる。言い換えれば、「他人」との対面としての直接的な現前とは、把握するものの限界における非現前性の現前、もしくは把握することの限界そのものの現前とみることが可能である。

こうしてみれば、「他人」に与えられた特権性としての現前の直接性や肯定性が堅牢なものではなくなってくる。しかし、レヴィナスが記述しようとしているものの質をこのように形式によってのみ否定することはできない。なぜなら、レヴィナスのこれらの規定は、あくまでも単

³ 「女性」に関しては、特権を与えつつも、留保されることが可能であるような両義的な存在であるとされるが、女性を享受される「糧」的な側面と享受されない「他人」的な側面の両方にかけて分析することが可能であるので、他人にのみ認められる特権性という主張を根本から揺るがすものではないと考える(Levinas, 1971, 314)。

なる記述上の制約としてとらえることも可能であり、他人の肯定性とその記述上の不可能性が連動しているとは限らないからである。そして何よりもデリダが指摘するように、レヴィナス自身が既に無矛盾の形式論理に対して意識的な異議申し立てをおこなっている以上、矛盾を指摘することだけでは批判とはなりえない(Derrida, 1967, 178)。

しかし、レヴィナスの特権的な他者に付きまとう否定性を単なる記述上の問題とみなすということは既に、述定と他者を分離することができるというレヴィナスの根本立場に同意することになる。したがって、この問題を単なる記述上の制約かどうかを含めて検討する必要性が生じてくる。次はこうした検討を、レヴィナスの行ったフッサールやハイデガーに対する批判に対するデリダの反論を言語という視点から整理しつつ行っていく。

2. 二つの全体性と言語の問題

上ではレヴィナスが全体化への動きに抵抗するために、＜同＞の原理からの断絶について述べたが、全体性の概念の内実はまだ曖昧なものであった。関根小織によれば、レヴィナスの全体性概念には、自己拡大型の全体性と自己消失型の全体性という二つの意味合いが込められている。自己拡大型の全体性は、フッサールの現象学のように、認識モデルに基づき、自我によって他者が同化されるものである。これとは反対に、自己消失型の全体性は、ハイデガーの存在論のように、「存在」という中立的なものへの準拠によって、自己と他者の断絶を融和するものである。前者は主体性の権能を拡大することで全体性を作るが、これを回避しようとして後者は主体性を否定し、存在という中立的で非人称的な全体性を作ってしまうというのがレヴィナスの批判である(関根、2007、40-41)。前者を批判することで他者を見出し、後者を批判することで主体性を救出するというレヴィナスの目論見は確かに見事なものである。

しかし、レヴィナスの現象学や存在論に差し向けた批判に問題がないわけではない。デリダは「暴力と形而上学」においてレヴィナスのそうした議論に対して批判的な検討を加えている。「暴力と形而上学」の全体を通じて、デリダはレヴィナスの「他者への尊重」という動機を共有しつつも、現象学や存在論との対決において、それらには他者との絶対的な分離が欠如しているものとみなしてレヴィナスが批判していることに対して、現象学や存在論に内在的な倫理的な側面を呈示しつつ擁護している。フッサールの現象学については、「類比的準現前化」(*l'appréhension analogique*)に加えられたレヴィナスの批判の妥当性が検討される。また、ハイデガーの存在論については、「存在」という語に加えられた「中立性」(*neutralité*)というレヴィナスの批判の妥当性が検討される。

この二つの検討を通じて浮かび上がってきた問題が言語に関するものである。上記の具体的な分析に先立って、次のように予告している。

次にわれわれがその原理を示すべく努めようとしている問いはすべて、意味は多様であるとはいえ、言語の問いである。すなわち、言語についての数々の問いであり、言語という問いである。ただ、もしわれわれの註解があまりにも不実でなかったとすれば、それ自身でこれらの問いとみずから係わらないものはレヴィナスの思想のなかに何ひとつないということ、この点はすでに確信していただけたに違いない。(ibid., 213)

結論からいうと、フッサールやハイデガーとの対決において、レヴィナスが暴力として回避しているのは言語の述定的な開示機能であり、そのことの不可能性をデリダが指摘している。以下においては二つの具体的な分析を整理した上で、それぞれがいかに言語の述定的な開示機能と関連しているかを示し、デリダの言語観を明らかにする。

2-1. レヴィナスのフッサール現象学に対する解釈における言語の問題

レヴィナスにとってフッサールとハイデガーはギリシャ由来の哲学的な伝統、言い換えれば、「光」の伝統の継承者であり、レヴィナスはこうしたギリシャの伝統からの脱出を図ろうとしている(Derrida, 1967, 165-180)。フッサールの現象学にあって、この「光」の伝統は、「観照至上主義ならびに客体意識の優位」として姿をあらわす(ibid., 236)。つまり上で述べたようにレヴィナスはフッサールの現象学の根本にある認識モデルに基づく同化を批判している。この問題が「他人」に突き当たったときに、最も先鋭化される(Derrida, 1967, 239)。

デリダによれば、レヴィナスにとってフッサールは他人を自我にもとづいて構成することで、他性を同化したと見なしている。

レヴィナスによると、とりわけ『デカルト的省察』のなかで、他者をエゴのひとつの現象たらしめ、このエゴの現象を、エゴ固有の帰属領域にもとづく類比的準現前化(l'appréhension analogique)によって構成されたものとみなすことで、フッサールは他者の無限の他性を取り逃し、それを共に還元してしまったとされる。レヴィナスがしばしば言っていたことだが、他者を他なるエゴ(alter ego)たらしめること、それは他者の絶対的他性の中性化することなのだ。(ibid.)

しかし、デリダはこのようなレヴィナスによるフッサールに対する批判からフッサールを擁護しようと試みる。その論理は以下のように整理できる。他者としての他者を尊重するためには、どのような形で、私に対して現れる必要がある。その現れる仕方をフッサールは確かに間接呈示として位置付けたが、この間接呈示の間接性に注目して解釈してみるならば、フッサールは他者の他者性を同化したのではなく、次のことを主張していることになる。

超越論的なもの（世界の方向づけにおけるもうひとつ別の絶対的起源にしてもうひとつ別のゼロ点）としての他者が、根源的な仕方で、ありのままに私に与えられうるなどということは決してなく、ただ類比的準現前化によって自我に与えられうるというのは明白である、それも本質的で絶対的で決定的な明白によって明白である。(ibid., 242)

つまり、間接呈示によってフッサールは他者の他性を還元したのではなく、むしろその他者への到達における媒介性の必然性を強調することで、他者をそれとして尊重していたといえる。そうであるなら、レヴィナスとフッサールとの根本的な差異は媒介性に帰結することになる。

1節で分析したように、レヴィナスは「他人」に現前の無媒介性の特権を与えており、それ

によってそうでない他者とは原理的に区別をする。フッサールも物体の他性と他人の他性を区別するけれども、類比的準現前化を認めることによって、フッサールは自らに「無限に他なるものについて語る権利を自身に与える」ことができた。しかし、レヴィナスは「事実上無限に他なるものについて語っているけれども、そこに志向的な変容を認めることを拒んだ」ので、自身が無限に他なるものについて語る可能性を奪ってしまった(ibid., 244)。

この拒否によってレヴィナスが回避したかったものとは他を共に還元するという暴力であり、それによって引き起こされる戦争という全体化の運動である (Levinas, 1971, 15)。この全体化する暴力に対して絶対的に抵抗をするものが絶対的な他者としての他人である。類比的準現前化はレヴィナスが絶対的な他者として設定した他人を還元する通路を再び打ち立ててしまうという意味において、レヴィナスによって拒否される。

フッサールの現象学との決別を図るレヴィナスは、他人の私に対する優位を打ち立て、他人と自我を同一平面上に並置するのを避けることで、全体化に抵抗しようとする。この優位は、例えば他人と私との間の「教え」の関係や (ibid., 117)、他人が私の自由を問いたただすことによって証されている(ibid., 151)。このような非対称性はフッサールには認められないどころか、レヴィナスからみれば、類比的準現前化は結局私による他人の経験の仕方ではないので、自我の優位に帰着するものである。上ですでに述べたように、現象学的には、この拒否は他人について語ることの正当性の問題を引き起こす。他人の直接的で無媒介的な現前は部分的にこの問題に対処している。というのも、このような現前の仕方は類比的準現前化とは別の仕方では他者が現れるということに対する説明を与えはする。しかし、概念によって捉えられない以上——それがフッサールの仕方とは違って、概念によってとらえるもの「より多く」のものを呈示するとはいえ——、本質的に他者についての述定は禁止される。そのため、レヴィナスは実質的に他者について述定しているということが説明不可能なことになる。

したがって、デリダが述べるように「一切の規定された意味、一切の思考された意味、一切のノエマ（たとえば倫理の意味）はノエマ一般の可能性を想定しているから、超越的論的現象学から権利上始めるのが妥当である」 (Derrida, 1967, 237)。レヴィナスのフッサールへの批判に反して、デリダはフッサールの現象学における根本的な概念である「志向性」という概念に、「他の同への永遠の還元不可能性」を見る。なぜならば、志向されたものとしてのノエマは「現実的な(réel)契機ではなく」、したがって、いかなる他者と現実的な関連をもつこともなく、還元することがないからである。「現象学は尊重そのものであり、尊重そのものの展開であり、それが言語へと生成することである」 (ibid., 235-237)。

他者を他人から考えるレヴィナスとは逆に、このように理解された他者一般の現象性を前提としてはじめて、他人の尊重が考えられるのである。他者一般をとらえることの意義について、デリダはフッサールの現象学を次のように述べている。

諸物体〔身体〕、超越的で自然的な諸事物は、私の意識にとって他者一般である。それらは外にあり、それらの超越はすでに還元不可能な他性の徴しである。レヴィナスはそう考えないが、フッサールはそう考え、諸事物に関してもすでに「他者」を云々することは何らかの意味を持ちうると考えている。これは外的世界の現実性を真剣に受け止めているとい

うことだ。(ibid., 242)

レヴィナスと異なる仕方で、他性を尊重するという意味において、フッサールの現象学の可能性を積極的にデリダが展開したといえる。他人が物体であることを認めること、述定することを許容することは必ずしも他性の毀損にならず、むしろ、積極的に他性の尊重の基盤となりうることを示されている。自我拡大型の全体化に対するデリダの批判はここにおいて示された。次はそれを回避すべく考案されたとされる自我消失型の全体化であるハイデガーの存在論についてのデリダの議論を見ていくことにしよう。

2-2. レヴィナスのハイデガーの存在論に対する解釈における言語の問題

レヴィナスがハイデガーの存在論に対して差し向けた批判は次箇所集中的にあらわれている。重要なので、全部引用することにする。

ハイデガーにおける存在論の優位は、「存在者を認識するためには、その存在者がそもそも存在していることを理解していなければならない」という自明の理にもとづくのではない。存在者との関係における存在の優位を肯定することは、哲学の本質についてそれだけで、ある宣言をすることである。それは、一箇の存在者であるだれかとの関係（倫理的関係）を、存在者の存在との関係に従属させることなのである。その存在は非人称的なものであって、存在者を把持し、存在者を（知の関係のもとで）支配することを可能にし、正義と自由に従属させるのである。(Levinas, 1971, 67, 強調は原文のまま、一部改訳)

「だれか」(quelqu'un)とは人を現すための代名詞であり、他人との関係に特権性の問題がここにも姿を現す。「存在」は存在者、とりわけだれかである存在者を中立化させる媒介であり、この中立的な媒介である「存在」は、最終的に同と他の峻別を溶解ささせ、全体化させるとレヴィナスは考えている(ibid., 68)。デリダはこのような「存在」理解について異論を唱える。その理由を二つ挙げている。

一つ目は存在と存在者の不可分性に係わる。デリダはハイデガーの重要なテーゼに目を向けさせる。「存在は、そのつど、なんらかの存在者の存在である」(SZ, 27)。このテーゼに従う限り、レヴィナスがそう理解したように、存在者と分離した存在を思考したり、存在者に先立つものとして思考したりすることができない(Derrida, 1967, 266)。存在と存在者との差異についてデリダは以下のように述べている。

実際には、存在と存在者のあいだには、通常の意味での区別さえない。それにはいくつもの本質的な理由があるのだが、まずは、存在は存在者の外では何ものでもなく、開けは存在的一存在論の差異に帰着するのだから、言語のなかで存在を分節的に明言し、言語のなかで存在を流通させるためには存在の隠喩を回避するのは不可能である。(ibid., 271)

存在—存在論的な差異とは存在と存在者の差異のことであって、「存在の隠喩」とはしたがって、存在を存在者のように表すことである。存在は存在者でないにもかかわらず、存在者のようにあるいは存在者として存在を表現せざるを得ない。この「ように」あるいは「として」は隠喩性と呼ばれる。このことを確証するように、デリダはハイデガーの『ヒューマニズム書簡』から次の言葉を引用しながら次のことを述べる。「ハイデガーは、言語について、言語は「存在そのものの照らしだすと共に隠蔽する到来」(lichend-verbergende Ankunft des Seins selbst) (『ヒューマニズム書簡』) であると言ったのだ。言語は一挙にしてそして同時に、存在そのものを照らし出し隠蔽する。にもかかわらず、存在そのものは、一切の隠喩に絶対的に抵抗する唯一のものなのだ」(ibid.)。つまり、存在を表すためには、それを存在者のように述定するしかないが、そのことは同時に存在そのものを隠蔽する。そしてこの関係の不可分性は、フッサールの場合と同じように、言語の不可避性を招来する。

第二の理由は、存在が概念やカテゴリではないということに係わる。2-2の冒頭の引用で示したように、レヴィナスは存在と存在者の関係を知による支配の関係としている。しかし、デリダによれば、レヴィナス自身がすでに認めているように、ハイデガーにおいて存在と存在者は「知の関係」ではない(ibid., 273)。存在は存在者について何一つ教えてはくれない。したがって、「存在を存在者の全体をカバーできるほど十分に未規定的で十分に抽象的なあの術語の概念などではない」。存在はあらゆる差異を消去すべく作られた最上位のカテゴリではない。むしろ、存在は「あらゆる差異や述語を可能にするもの」である(ibid.)。したがって、あらゆる差異、そのなかでもとりわけ根本的なものとして、同と他の差異を消去する中立的な媒体として存在を思考するのはハイデガーの存在概念の読解としては不当なものであるとデリダは主張している。その上、ハイデガーに限らず西洋の哲学的伝統において常にそうであった。デリダはこのことを脚注において、アリストテレスを引き合いにだしながら説明している。

存在はひとつの述語ではない、とは言わないまでも、少なくともそれは他の数ある述語のひとつではなく、**超越論的**もしくは**超カテゴリ的**な述語なのである。それに、『ソフィスト』はわれわれに次のことを——これは同書の主題にほかならないのだが——教えてくれる。すなわち、存在は、自己と同じものである他とも、同とも異なるものとして、他のあらゆる類のなかにそれらが**存在する**限りで含まれているのだが、かかる存在は差異を受け付けないどころか、差異を解き放ち、このような解放によってのみ、それがそうであるところのものたりうるのである。(ibid., 275, 強調は原文のまま)

このように存在を理解したときに、「存在の思考もしくは存在の前—了解は、概念的で全体主義的な抱握〔了解〕⁴をまったく意味していない」。それどころか、存在の思考ははじめて他者についての思考であって、「存在は思考の他者である」(ibid., 276)。

存在と思考のこうした関係から、デリダはさらに先に進んで同と他の脱構築を行う。

⁴ 原文は *comprendre*。この単語はフランス語において、理解するとともに包含するという意味を合わせもつ。レヴィナス批判はこの二重の意味において、すなわち概念理解による全体化という意味から理解することができる。

存在が思考による存在させることを介してのみ存在し、思考はというとそれが存在させる存在の現前を介してのみ思考する以上、思考と存在、思考と他は同じもの(*le même*)である。思い起こしていただきたいが、これは同一的なもの(*identique*)、あるいは一なるもの、あるいは同等なもの(*égal*)というという意味ではない。(ibid.)

レヴィナスが他人という絶対的な他者を設定することで、同と他の無限な分離を強調するのに対して、デリダは同と他の不可分性をハイデガーの存在論から読み出すということができる。思考とその他者である存在とは不可分な関係にありながら、両者の間の還元不可能な差異、言い換えれば存在者と存在の差異によって思考と存在の双方が生起する。「思考は存在である」というときに、存在動詞の(で)ある「être」と同(*le même*)が同じ働きをするが、その内部にすでに上記のような差異を内包し、それを前提としている。その意味において、存在動詞や同は、差異を完全に消去する「同一」、「一」、「同等」といった概念と区別される。そして、このような差異を内包した同や存在についての思考があらゆる言語の根本的な土台にあるならば、レヴィナスの想定と逆に、あらゆる語による同定は、そもそもその内部にもしくは前提として他者をもつ。それどころか、そうした差異—同定がなければ、他者が他者として存在することができず、レヴィナスのいう他者の尊重もありえないということになる。

このように、デリダはハイデガーにおいてその存在論的な内部から、レヴィナスとは異なる存在の理解を引き出した。他者として存在の理解は、同と他の関係を絶縁関係から、不可分な関係へと転換させた。フッサールと同様にハイデガーからもまた言語のアポリア——他者を表させ、存在させるとともに変容、隠蔽する——に行き当たった。このアポリアをデリダは超越論的な暴力と呼んだ。ここに暴力についてのレヴィナスとデリダの思考の相違があり、次はそれをみていくことにする。

2-3. 言語の隠喩性と暴力性

フッサールおよびハイデガーの議論から帰結されるのは、レヴィナスにおいて問題となるのは結局言語の問題であるということである。これに続いてデリダはその立場を表明するが、その立場を二つの論点から整理できる。一つは言語の隠喩性であり、もう一つは言語の暴力性である。

いかにして言語は隠喩的なものであるのかはこれまでの議論からは明白である。フッサールの場合には類比的準現前化が問題となり、この不可避性について述べてきた。このときに「類比的」とはまさにここでいう「隠喩」のことに該当するものである。またハイデガーの場合は、照らし出しと隠蔽の同時性が問題になったが、このときも存在はあくまでも存在者のように現れるという仕方が「隠喩」に該当する。しかし、レヴィナスは他人においてこの隠喩性の回避を試みる。他人の直接的な現前という現われ方、言い換えれば、いかなる屈折も経ず、いかなる誤解や曲解も経ることのない現前という想定それ自体が隠喩性の回避である。

この直接性はレヴィナスにとっての全体化への抵抗の契機であったことはこれまで述べてきた通りであるが、同時にそれは純粋な非暴力という状態の想定でもある。なぜならば、レヴィ

ナスにとっての暴力とは全体化する力であって、それに対して絶対的な他者としての他人と私との関係は根源的には非暴力であるから。しかし、レヴィナスにとっての非暴力的な言語である「語り」(parole)⁵は、結局「～である〔存在する〕」という動詞を、つまりは一切の述定作用を奪われた」ものであり、このような純化された言語は呼びかけや固有名をしか発しえず、「言語の名に値しない」(ibid., 292-293)。したがって、デリダはレヴィナスとは逆の思考の道を取る。つまり、言語を暴力だとするならば、言語の暴力性は回避しえない。その意味において、デリダは言語を超越論的な暴力、ないし存在論的暴力としたのである(ibid., 250)⁶。この超越論ないし存在論的な暴力なしには、レヴィナスが想定するような倫理的な非暴力も暴力性もありえない。

では、他者の他者性の問いや、存在そのものへの問いは単なる一種の理念に過ぎないのかというところでもない。そうした思考は言語の隠喩性、暴力性を暴露するとともに、我々を歴史の思考に差し向ける(ibid., 284)⁷。言語の隠喩性そのものが思考されるのは、隠喩の転換が行われたときであり、隠喩の転換が歴史なのである。「暴力と形而上学」のⅠの最後で、デリダはボルヘスを引用しながら次のように述べている。

言語によってしか歴史がなく、言語が（存在**それ自体**を名指すか、あるいはまた何も名指ししない場合を除いて、しかしそれはほとんどありえない）基本的に隠喩的なものであるなら、「おそらく世界史は若干の隠喩の歴史でしかない」というボルヘスは正しい。(中略) 光はおそらく反対物をもたない。とりわけ夜は光の反対物ではない。あらゆる言語が光のなかで格闘しつつ、単に同じ隠喩を変容させ、最善の光を選んでいいるなら、ボルヘスは、数頁先でもまた正しい。「おそらく、世界史は、若干の隠喩の多様な抑揚の歴史である」[「パルカスの天球」、強調引用者]。(ibid., 180)

つまり、我々が言語の暴力性から完全に逃れきれることはないが、このことは暴力性の容認とはならず、歴史のなかにおいて、我々が絶えず引き受けなおさなければならない課題として呈示されている。

3. 教育哲学に立ち返って

これまでレヴィナスにおける「他者」と「言語」についてのデリダの批判についてみてきたが、

⁵ この「語り」(parole)とはレヴィナスが想定する非暴力的な言語である。語りには現在において自分自身の語るものを守ることができるが、語られたものは自分自身を守られず恣意的な解釈に歪められる(Levinas, 1971, 111-126)。しかし、このような語りは顔と一致することで、結局は言語の述定作用が否定される。

⁶ フッサールと関連において言語は超越論的な暴力と呼ばれ、ハイデガーと関連において言語は存在論的な暴力と呼ばれる。このことについて次の論文を参照した。亀井大輔(2006)「＜歴史＞をめぐるデリダとレヴィナス」——暴力と形而上学——について」現象学年報 22 号所収、現象学会。

⁷ ハイデガーの存在論の歴史の破壊という観点からこの点について論じているが、詳細に踏み込むことができないが、デリダのハイデガー講義を参照されたい(Jacques Derrida, Thomas Dutoit et Marguerite Derrida (ed.), *Heidegger : la question de l'Être et l'Histoire*, Paris, Galilée, 2013)。

その知見を踏まえて、最後に冒頭で述べた教育哲学における他者論の問題に立ち返って少し述べてみたい。

これまでの教育哲学における他者の受容の仕方については、小野文生が「教育哲学における他者解釈の技法の機制について——レヴィナスとブーバーの比較を通して」(2002)においてまとめているように、「子ども」を他者として再発見する形で受容してきた。それ以降の論考はこれをうけて、異なる側面からレヴィナスへとアプローチを試みたものの、他者を人間と見なすということに関しては一貫しているといえる。しかし、本論はデリダの立場から他者を人間に限定した見方からより一般的に言語の暴力性の問題として捉えなそうと試みてきた。そのことは、「子どもの他者性の尊重」や「教育者の教育責任の強調」といった受容の仕方へは少なくとも次のことが提起できると思われる(ibid., 61)。

「他者」を恣意的に教育者や子どもに限定するのは不当なことである。それは単なる両者の平衡論にいきつくのではなく、そもそも根源的に、自己と他者の対称的な関係を前提としない限り——むしろ、これは自他の差異を否定することではないことはこれまで見てきた通りである、とりわけフッサールの議論における他我の問題についての議論はそれを証左している——他者としての他者についての思考することもままならない。

また、この問題は単に受容する姿勢の問題に留まらない。レヴィナスの哲学自体に内在する問題として、捉えなおした時に、他者との直接的な関係よりも言語を介した間接的な関係の地平が見えてくる。この言語の地平において、我々はすでにあらゆる他者によって呼びかけられており、言語の生起はすでにそうした他者たちへの応答なのである。そうした微細な差異を黙殺することなく、レヴィナスの言葉を借れば「迎え入れる」ためには、迎え入れる仕方の問いに常に開いておく必要がある。

文献一覧

*文中の（）内は邦訳の頁を記したもの。

Derrida, J. (1967) *L'écriture et différence*, Paris, Seuil. (『エクリチュールと差異』合田正人、谷口博史訳、法政大学出版局、2013 年)

Heidegger, M., Roger Munier (trans.) (1957) *L'être sur l'humanisme: Lettre à Jean Beaufret*, Paris, Éditions Moutaigne. (『ヒューマニズムについて』佐々木一義訳、理想社、1974 年)

Heidegger, M., François Vezin (trans.) (1986) *Être et temps*, Paris, Gallimard. (『全体性と無限』原佑、渡邊二郎訳、中公クラシックス、2012 年第 4 版)

Levinas, E. (1971) *Totalité et infini: Essai sur l'extériorité*. (『全体性と無限』熊野純彦訳、岩波文庫、2005 年)

Lévinas. E.(1985) *Le temps et l'autre*, 2e éd., Presses universitaires de France.(『時間と他者』原田佳彦訳、法政大学出版局、1986 年)

関根小織 (2007)『レヴィナスと現れないものの現象学—フッサール・ハイデガー・デリダと共に反して—』晃洋書房。

小野文生 (2002)「教育哲学における他者解釈の技法の機制について—レヴィナスとブーバーの比較を通して—」教育哲学研究第 85 号所収。

亀井大輔(2006)「＜歴史＞をめぐるデリダとレヴィナス」——暴力と形而上学」について」現象学年報 22 号所収、現象学会。

平石晃樹 (2010)「レヴィナスにおける苦しみをめぐる思考と人間形成への問い—「無益な苦しみ」を中心に—」教育哲学研究第 101 号所収。

平石晃樹 (2011)「自律と他律—レヴィナスにおける＜教え＞の概念をめぐる—」教育哲学研究第 104 号所収。

山口美和 (2015)「エマニュエル・レヴィナスの思想における「近さ」の意味」教育哲学研究第 111 号所収。

(臨床教育学専攻 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2015 年 9 月 1 日、改稿 2015 年 11 月 4 日、受理 2015 年 12 月 24 日)

「暴力と形而上学」における他者と言語の問題

—教育哲学における「他者論」についての予備考察—

朱 燁

本論はデリダの「暴力と形而上学」におけるレヴィナス批判を他者と言語の問題を中心に整理することで、レヴィナスの他者についての思考の仕方に現れる人間中心主義的な傾向の問題を批判し、言語に内在する本質的な他者性から他者の問題を思考しなおそうとする試みである。より具体的には、デリダの議論に沿って、レヴィナスのフッサールの現象学批判やハイデガーの存在論批判から、それらの他者論としての可能性を追求することによって、レヴィナスにおける絶対的な他者としての他人の特権性を、より一般的な他者の可能性から論じ直した。このことから、同と他の絶対的な分離という図式から、同と他の言語における不可分性へと転換させることで、言語の不可避免的な暴力性を明らかにした。この結論を引き受けて、教育哲学における他者論に受容の問題を言語の問題としてとらえなおすことを提言した。

The issue of the other in “Violence and Metaphysics”: preliminary thinking on the theme of the other in Philosophy of Education

ZHU Ye

This paper follows Derrida’s work “Violence and Metaphysics” to provide a critique of the issue of humanism in the philosophy of the other proposed by Levinas, to rethink the issue of the other from the linguistic perspective. It follows Derrida’s critique of Levinas against Husserl’s phenomenology and Heidegger’s ontology, to reconstruct the issue of the other in general rather than following Levinas, who gives privilege to the other human. In addition, it changes the absolute separation model of the same and the other to a new model, in which the same and the other cannot separate from each other in language. It is suggested that the issue of the other in the Philosophy of Education should be seen as an issue of language.

キーワード： 他者、言語、レヴィナス、デリダ

Keywords: other, language, Levinas, Derrida